

研究授業「音楽Ⅱ」の実施

柴田玲子*

The Open Class “Music II”

Reiko Shibata

1. 研究授業の日程

研究授業および検討会は次の日程で行われた。

〈研究授業〉

日 時：2006年6月19日（月）4校時 14時40分～16時10分

場 所：C第一講義室

〈検討会〉

日 時：2006年6月19日（月）5校時 16時20分～17時50分

場 所：A保育演習室

参加者は保育学科教員 8名

2. 本講義の目標

子どもの豊かな感性を引き出すために音楽の面からどのようなアプローチができるかと言えば、まず「環境」を整えることが考えられる。子どもが自然の中で身近な音に気づき、その感動を自分なりの方法で表現しようとしている時に、それを即座に受け止めて増幅・共感できる人、遊びや生活の中で生まれたメロディーやリズムのおもしろさを子どもたちに返せる人そのものが「環境」であるという視点から、学生ひとりひとりが将来望ましい音楽的環境になることができるよう、いろいろな方向から音や音楽とかかわる体験を重ねさせて現場での対応に備えたい。

3. 具体的に学生に身に付けてほしいこと

- 伴奏付け 歌のメロディーだけあれば簡単な伴奏をつけて弾くことができる。
コードネームがあればそれにしたがって和音がつけられる。
メロディーの雰囲気合った伴奏の形を工夫できる。
- 変奏 子どもたちがよく知っている曲を生活の各場面に合わせて適宜変化を加えて弾くことができる。
- わらべうた わらべうたが話しことばや呼びかけから発生したものであることを知り、子どもの表現をそのような観点から受け止めることができる。

その他、管弦楽曲や室内楽曲が子どもの感性を引き出すひとつの手段として使える可能性に気づく。

4. 受講生の状態

保育学科2年生17名。ピアノのレベルはバイエル程度からベートーベンやショパンを弾ける者までかなり差がある。しかし、伴奏付けや暗譜・移調などの課題をこなすスピードは技術に比例しているわけではない。集中力か努力か、逆転することもある。就職試験に備える意味もあって7月にソナチネ以上の曲を1曲、全員の前で演奏することを義務づけているので、授業中に設けるフリータイム（何を練習してもよい時間）には、その日の課題以外に自分の曲にも熱心に取り組んでいる。

5. これまでの授業の進行状況と本時の内容

第1回（4月10日）

簡単なオリエンテーションに続いて楽典の基礎。鍵盤図の書き方、音部記号、音符や休符の長さ、付点の位置などの知識を確認した後、楽譜を正しく書く練習。

第2回（4月17日）

三度音程、長3度と短3度の区別。長三和音と短三和音を作り、弾いてみることで響きの違いを実感させる。コードネームとの関連。ハ長調、コードネーム付きの

メロディーに伴奏をつけて弾かせる。フリータイム、練習。

第3回（4月24日）

前回のコードネームの復習。メジャーとマイナー以外のコードの基礎知識。和音の転回で近い位置に。ハ長調の主要三和音と属七を使った伴奏。基本パターンを暗譜して左手の形に慣れさせる。コードネーム付きの童謡に和音をつけて弾かせる。フリータイム、練習。

第4回（5月1日）

移調奏。ハ長調の童謡を和音付きで暗譜し、鍵盤上で平行移動する練習。ある程度慣れてから調号2個までの伴奏形基本パターンを譜面で確認する。コードネーム無しの童謡に伴奏をつける練習。どのコードが適当かの判断について。鍵盤上で探すことに慣れさせる。フリータイム、練習。

第5回（5月8日）

より複雑なコード構成の曲にコード一覧表で和音を探して伴奏をつけさせる。課題として中学・高校の教科書レベルの曲を用いる。（伴奏付けについては定着の段階に入ったので、課題を自主的にこなす作業となり、毎時フリータイムに）

変奏曲を作ることについてのオリエンテーション。2週間までにテーマとして使う曲を決定しておくことを指示。

第6回（5月15日）

レポート課題提示。わらべうたに関連のある保育の事例を配布し、それを読んで考えたことや感想を述べさせるもの。（実習という機会にそのような観点からも子どもを見てほしいのでこの時期に）返却時に話題を広げる予定。

フリータイムを多くして個対応。①7月に演奏する曲のレッスン ②変奏曲のテーマとして選ぶ曲の相談 ③伴奏付け・移調奏 など各自の課題に取り組ませる。

第7回（5月22日）

実習後の次回から変奏に取り組むため、テーマ曲の確認。全員が必ず扱うものとして、①行進曲 ②3拍子の踊り ③子守唄、を指定。それぞれについて大まかな概念を示す。一つのイメージにとらわれることなく、多様な場面を想定できることの例をいくつか紹介した。フリータイムは練習成果のチェック、相談。

第8回（6月12日）

変奏曲のテーマをシンプルな伴奏をつけて完成。その曲のイメージキャラクター

の絵を描き、そのキャラクターが何をしている場面の曲にしたいのか、ことばで5つ以上の箇条書きにさせる。

前回予告した行進曲と3拍子の踊り、有名な曲の冒頭部の楽譜を見て曲が思い出せるか読譜練習。いろいろな曲に触れてリズムパターンに慣れさせる。

踊り（主にワルツ）の変奏から実際にとりかかる。一曲の最後まで記譜するのではなく進み方のわかる数小節だけを書き留めるように指示。

第9回（6月19日 本時）

全員が数小節は楽譜にしてあるワルツを材料に、どのようにして独創性を加えるか、リズムを工夫して生き生きとした曲にできるかを話し合わせる。速い曲では単純な和音がさわやかであるが、ゆっくりになると単調さが表面化するので和音を変えて響きを味わってみる。各自の曲で可能性を試してみる。音域・速さなども配慮してもう一曲ワルツを作るように指示。

学生が個々にテーマとして選んだ曲

きらきら星 3名、ぞうさん 2名、おつかいありさん 2名、
まつぼっくり 2名、ありさんのおはなし、むすんでひらいて、
とんぼのめがね、にじ、めだかの学校、大きな古時計、はち、
チューリップ 各1名。

授業計画案

題 目	作った変奏をより魅力的な曲に
目 標	3拍子という枠の中で ①リズム的に ②和声的に どういう可能性があるか音で実感して、ワルツだけでなく、これから作る変奏も含めて各自の表現が豊かになることを目標とする。
14 : 40	入室した者から個人練習
14 : 45	ワルツをグループで聴きあった後、全体で代表者が発表 キャラクターの動きを想像できるか？もっとリズムカルなあるいは重厚な、といったように異なる表情のワルツも考えられるか？
15 : 10	3拍子のリズムパターンの例を配布 ①メロディー部分 ②伴奏部分 の可能性を検討 新しい場面を想定してワルツ冒頭部2小節程度を記譜
15 : 30	和音の変更について 多様なコード付けを試した曲例を配布 音を聴いて和声の流れを確認する。
15 : 40	和声のしくみを簡単に説明 基本的な和音進行に飾りの和音をはさむ方法 ↓ 自分の曲で使える場所は？
16 : 00	個々に配布したヒントをもとにして次回までに和音を書き込んで、弾けるように練習することを課題とする。

6. 今後の授業の予定

第10回（6月26日） 子守唄とは。子守唄と行進曲をイメージして変奏を作る。

第11回（補講） レポート返却と話し合い。子どもの表現を受け止めるには。

第12回（7月3日） 自由な発想で変奏を作る。これまでの伴奏づけ課題の整理。

第13回（7月10日） ピアノの演奏を発表する。これからの練習の取り組み方。

第14回と15回は、レポート提出、作品提出、ピアノの個人指導をもって替える。

ピアノについては、7月から11月にかけて就職を前に時間を調整して何回かずつ個人レッスンを実施する予定。

7. 研究授業を終えて

授業の流れはほぼ計画通りで90分が経過した。個々の学生が選んだ曲にヒントを与えるためには、それぞれのキーボードのそばに行き、学生にヘッドフォンを着けさせたままで（外には聞こえない状態で）何通りかを弾いて示す形をとっているのですが、ご参観いただいた先生方にはその部分がよく見えないという懸念はあったが、普段の授業のまま進行了た。

後ろに先生方がいらっしゃるせいか、学生たちは緊張気味でいつもの活発な質問や相談はなりを潜め、むしろもの足りないぐらい穏やかにこちらのペースで進んでしまった。

（1）目標設定について

① リズムの可能性

ワルツと言えば3拍子、学生が作ってきた曲は数名の意欲的作品を除けば、「とにかく1小節に3拍あればよい」と原曲の音符を拡大・縮小し、ワンパターンの和音伴奏をつけたものが多かった。グループ内で発表して聴きあうことで互いの類似性に気づき、一方では工夫のある個性的なアレンジのおもしろさも感じて新たな取り組みへのきっかけができたと思われる。

1小節を1小節に対応させることにこだわらないこと、休符やタイを用いて意図的にシンコペーションを作り出すこと、伴奏部分の多様な形、そして音域やテンポの問題について個々に提案すると同時に、もう一度イメージをキャラクター

に戻してキーボード上で「遊ぶ」くらいの気持ちで曲を弾いてみることであれば理想的である。

② 和声的可能性

ドミソ・ドファラ・シレソ・シファソ程度の和音で伴奏ができる童謡がほとんどであるが、少し緩やかなテンポの曲では和音を工夫することで色合いを変えることができる。近親調からの借用和音の内容なので理論的に高度になり現段階での導入はためらわれたが、コードネームと実際に響く和音について練習を重ねてきたこともあり、初めて取り組ませることにした。

まず「七夕」の曲を様々にコード付けした楽譜を配布し、和音記号とコードネームを見ながら聴いてみる。臨時記号のある和音は他の調からの借り物であり、最も多いのが属七であることに気づかせる。

↓

属七の和音について、その構造と限定進行音を説明、次の和音を強く要求する働きがあるので、たとえばソシレの前にはト長調の属七、レファラの前には二短調の属七を置くと自然にその和音を呼び出すことができることを、キーボード上で確認する。

↓

自分の曲のどこに借用属七を使うことができるかを検討させる。

(これは能力的に無理がある学生もいるので、あらかじめ授業者が作っておいたコードネーム付きの旋律譜を一人ずつに解答として与え、それをういてキーボードで試す、という作業が中心)

現段階ではまだ全員がコードネームからキーボード上の和音へ即座に移すことができるわけではない。時間をかけて考えながらも音を探ることで和声進行の必然性を体験させ、次の時間に予定しているゆるやかな子守唄で、自発的な利用が出てくることを期待している。

(2) 目標の達成度・学生の理解度について

リズム・和声の両方とも本時だけで完成するのではなく、変奏作りの全体を通して長い目で見てゆきたいと思っている。これまでも授業のいろいろな場面で、意

識的にそれぞれの可能性を扱ってきた。受動的ではあっても耳が慣れることが大切で、学生各自の音楽経験による個人差はともかく、音楽が特に得意な学生でなくても、表現したいという意欲を引き出すきっかけを作れるかどうかはそこにかかっている。リズムの変化には無限の可能性があって工夫次第で思ってもいなかったおもしろさが出せることや、いつも聴き慣れた曲でも、和声が変わるだけで柔らかな流れや新鮮な緊張が心地よいことに気づいたと思われるので、それをもとにしてこれから「豊かな表現ができる」保育者に育つように助言したい。

(3) 授業の形態について

選択科目であるため毎年受講生の人数が大きく異なる。7～8名の場合と25名前後を相手にする場合とでは当然授業の方法が違ってくるので、人数が確定してから最終的なシラバスが決定する。

理論的な内容の講義や曲の鑑賞は人数に関係なく、と言いたい現実にはその部分でも相当に変更しなければならない。旋律に合う和音を選ぶ方法一つとっても全体相手に説明するよりも数人をピアノの傍に集めて弾きながら・弾かせながらの方が具体的であり、学生も実感として把握できる。曲を聴かせる場合、聴いた曲から何を感じてほしいかという目的は一緒でも、学生にどう語りかけるか・どんな作業の前提とするかという点で人数は選曲の大きな条件となる。

一方では、何人学生がいようとそれぞれの能力に対してそれに見合う個人指導をする時間は大切にしたいと考えている。90分内のフリータイムをそれにあてるが、全員に対応することには限界があり、学生が満足しているとはいえない。意欲的な学生は休み時間や放課後に何度もやってくるが、中にはできるだけ弾かないですませたいようにしか見えない者がいることも否定できない。

検討会では、個人指導と全体指導のバランスがとれている・学生が今何をするべきかが明確で個々の取り組みを意欲的なものにできている、というプラス評価をいただいたが、毎時間、内容に応じて個人・グループ・全体のどこに重点を置くかについてはまだ試行錯誤が続いている。クラス授業であってもそれぞれの学生には個人指導を受けた満足感やその都度の小さな達成感を味わってほしいと思う。それが叶う授業形態の改善を目指したい。

(4) 今後の課題

研究授業と検討会でいただいたご意見を参考に、保育者として子どもたちの前に立つ学生に必要なことは何かを常に考えながら今後の授業を進めたい。

問題点として質問された点

- ・ 学生は今日の授業のレベルに本当に達しているのか？
- ・ 基礎となる理論やソルフェージュの指導は？
- ・ ピアノの演奏能力の現状は？

上記3点についてはそれぞれ互いに深くつながりがあるので、合わせて今考えられることを述べる。

基礎能力は入学以前の環境により個人差がはなはだしい。ピアノに関しては昨年度開講の音楽Ⅰで少しは弾いたもののまだ現場へ出せる状態ではない学生がいることも事実である。近くカリキュラムが改正されるが、今は2年になるとピアノの個人指導の授業がないために自分から積極的に取り組まなければ弾く機会がない。そういった問題をこの「音楽Ⅱ」ですべてクリアすることはできないが、一人ずつ伴奏付けさせたり13回目の授業（予定）でソナチネ程度以上の曲を弾くことを義務付けることで対応している。ほとんど毎時間設けているフリータイムでは全員が非常に熱心にキーボードに向かうことを見ても、弾く機会という点では成功している。楽典的な内容は音楽Ⅰで少し扱うだけなので、楽譜の読み書きだけでも常識を身に付けさせるためにワークシートを用いた作業を与えてきたが、まだ不十分である。

この授業のレベルに達しているかという質問に対しては、個人差があるのでひとことでは言えないが、80%程度の学生はスムーズに作業を進めているし、残りの数人も個々の指導でヒントを与えることで課題をこなすことができるので、一応、授業者の考えるレベルを達成できているとしたい。

子どもの感性を受け止めるのに最も必要なソルフェージュ能力については普段から気になりながらも手を付けることができなかつた。検討会でご指摘いただいた必要性を深く受け止めて改善を計画したい。

8. 改善の取り組みと効果

研究授業後の検討会で話題になった学生の基礎能力を高めることについて、次の学期

(2006年後期と2007年前期)に改善を目指して授業に取り組んだ。まだ実験段階ではあるが、自ら楽譜を書く機会を意識的に増やして楽典上の問題点を自発的に発見できるようにすることと、ソルフェージュ面の指導の二点である。以前から鍵盤に触れることを第一に授業を進めてきたが、学生たちはより積極的に「弾く」ようになった。実音で確かめなければ不安で前に進めない。ある意味で新たな問題とも言えるが、今のところ喜ばしい変化である。その変化をどのようにうまく使っていくか、これを新たな課題として考えていきたい。

なお、2007年度入学生からはこの音楽Ⅱと並行して新しい科目「ピアノ特別演習」がスタートする。ピアノの個人指導の部分を取り出して実施できるようになるため、音楽Ⅱではそれ以外の内容に時間をかけて、一層の充実を目指す予定である。

おわりに

演習科目は研究授業として成立するのだろうか、という不安があったが、研究授業のために指導計画を変えることもできず、通常のペースで授業を行った。専門分野の異なる先生方が熱心にメモをとりながら参加して下さり、違った観点からの貴重なご意見をいただいたことを本当に嬉しく思う。客観的な立場からものを見ることの大切さを、授業者として今さらのように実感した。

授業を公開して互いに研究しあうこのシステムのねらいが授業改善にあることは言うまでもないが、それを通して教員間の意思の疎通をはかることができるということも、大きな利点ではないだろうか。学生と共に教員どうし高めあう、そして学科が一体となり、ひとりひとりの学生を育てるために向上心を持って努力することの必要性を認識して学生と接したいと思う。

研究授業・検討会と長い時間お付き合いいただきました先生方、一緒に授業を作り上げてくれた学生の皆さんに心よりお礼申し上げます。

高松大学紀要
第 49 号

平成20年 2月25日 印刷

平成20年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841 - 3255
FAX (087) 841 - 3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町 1 - 8 - 10
TEL (087) 833 - 5811